

報 告 書

総務教育常任委員会は、令和5年11月16日（木）に、県内視察調査を実施しましたので、その概要を別紙のとおり報告します。

令和6年1月29日

福井県議会議長
西本 正俊 様

総務教育常任委員会
委員長 宮本 俊

総務教育常任委員会 県内視察 調査概要

- 1 視察年月日 令和5年11月16日(木) (日程詳細は、別紙のとおり)
- 2 出席者 別紙「総務教育常任委員会 県内視察調査出席者名簿」のとおり

3 視察先及びその概要

(1) 福井県立大学 永平寺キャンパス (吉田郡)

窪田理事長のあいさつの後、資料に基づき概要説明を受け、質疑応答を行った。

○「次世代の地域リーダーを養成する新学部について」

説明者：福井県立大学 理事長 窪田 裕行 様

福井県立大学 事務局長 渡辺 利章 様

(2) 福井県立武生高等学校 (越前市)

島田校長のあいさつの後、資料に基づき概要説明を受け、探究進学科の授業の視察を行った。

その後、追加で概要説明を受け、質疑応答を行った。

○「探究進学科の取組と成果、今後の課題について」

説明者：武生高等学校 校長 島田 芳秀 様

4 質疑概要

別紙のとおり

総務教育常任委員会 県内視察調査日程表

実施日 令和5年11月16日(木)

時 間	行 程
9 : 0 0	議事堂 発 (バス)
9 : 3 0 (90分)	福井県立大学 永平寺キャンパス 着 (所在地) 永平寺町松岡兼定島4-1-1 (電 話) 0776-61-6000 ○概要説明 「次世代の地域リーダーを養成する新学部について」 ○質疑応答
11 : 0 0	視察終了
11 : 5 0	昼食 (越前市内)
12 : 5 0	同地 発
13 : 0 0 (120分)	福井県立武生高等学校 着 (所在地) 越前市八幡1丁目25-15 (電 話) 0778-22-0690 ○概要説明 「探究進学科の取組と成果、今後の課題について」 ○質疑応答 ○探究進学科の授業風景視察 (45分)
15 : 0 0	同地 発
15 : 4 0	議事堂 着 (解散)

**総務教育常任委員会
県内視察調査出席者名簿**

【派遣委員】	(氏 名)	(期別)
委員 長	宮 本 俊	4 期
副委員 長	清 水 智 信	3 期
委 員	山 岸 猛 夫	7 期
〃	渡 辺 大 輔	2 期
〃	山 浦 光一郎	2 期
〃	時 田 和一良	1 期
〃	堀 居 哲 郎	1 期
〃	福 野 大 輔	1 期
〃	山 岸 みつる	1 期
		(委員計 9名)

【地係議員】

福井県立大学関係

吉田郡選挙区 酒井 秀和 1 期

福井県立武生高等学校関係

越前市今立郡南条郡選挙区

仲倉 典克 6 期
 〃 細川かをり 4 期
 〃 三田村輝士 1 期

【議 会 局】

議事調査課 主任 大久保 由美

〃 主任 山本 紘一郎

質 疑 概 要

1. 福井県立大学 永平寺キャンパス

(1) 説明要旨

○福井県立大学の現状について

- ・福井県立大学は県内唯一の公立総合大学である。本県を担う人材を育成すること、県民や県内企業と一緒に地域貢献をすること、本県を取り巻く様々な地域課題の解決に貢献していくことが求められている。県の機関だった時代も含めると、本学は32年目を迎えている。
- ・公立大学法人は6年間に1度、中期目標を策定する必要があるが、現在3期目の5年目にあたる。この中期目標を実現するために第3期中期計画をつくっているが、初年度からコロナに見舞われ、厳しい船出であった。
- ・中期計画の中で、2学部2学科1研究科の新設を明記している。4学部を持つ大学にこれだけの新しい学部等を新設するのは簡単なことではないが、少子化の進行や若者の県外流出による地域活力の低下などの課題を解決するため、中期計画で立案した。
- ・創造農学科は令和2年に開設、先月には先端増養殖科学科を開設している。健康生活科学研究科については、今年4月に開設した。恐竜学部(仮称)については来年度に学生募集を行うため、今年度末の文部科学省への認可申請の準備を進めている。キャンパスについては、実施設計が進んでいるところである。
- ・本学の入学定員は現在430名であり、2年後の恐竜学部(仮称)の開学によって460名まで拡大する予定となっている。
- ・4月に情報センターを開設し、大学のDX推進に取り組んでいる。また、国際センターの設置に向けて準備をしている状況である。

○文系学生の進学について

- ・今年3月の県内高校卒業生6,667人のうち、大学進学者は3,843人。うち文系学部進学者は1,875人であり、そのうち県内大学進学者は約2割にとどまっている。理系の場合は、48.5%が県内大学である。県内大学の入学定員は、県内高校からの大学進学者総数の63%相当であり、十分な収容力がない状況である。さらに、文系学部の収容力は3割を切っており、全国最下位レベルであると思われる。
- ・県内文系定員520名のうち、200名が県立大学である。32年前に本学が開学するまでは県内に文系学部が存在せず、文系学部に進学するには県外に行く必要があった。当時と比べて文系大学進学者が半分以下に減り、文系定員数が増えたため、数字上は文系収容力は改善しているものの、全国平均からは乖離がある。これが本県の若者流出の大きな要因にもなっている。
- ・理系学部定員の3分の2は国公立大学が占めている。これは、理系学部の設置、運営に多額の費用を要するためである。一方、文系学部は国公立大学が全体の25%、私立大学が75%を占めている。文系学部の多くは、都市圏の私立大学が担っている。文系学部は大人数教育が可能であり、設備投資が少なく収益率が高い

ためである。

○「次世代の地域リーダーを養成する新学部」について

- ・ 県は長年、福井大学等に文系学部の設置を要請してきたが、設置の動きが見られないため県立大学で文系の収容力を担う決断をした。
- ・ 新学部設置について、県内の他大学からは学生の取り合いにならないかといった懸念の声があるが、県教育委員会のアンケートによると、昨年県外の大学に進学した高校生約 2,500 人のうち、県内に希望する学部がなく県外に進学した人が最低 100 人、また、県立大学不合格者 350 人のうち、県外に進学した人は 140 人いる。県内に残りたいが残れなかった人は少なくとも年間 240 人はいることになり、相当数の人材を流出していることになる。新学部設置は小さなパイを奪い合うものではなく、県内進学者のパイ自体を大きくする取組である。
- ・ 2022 年の出生数は、統計開始後初めて 80 万人割れの約 77 万人となり、推計よりも 10 年早く 80 万人を切った。いずれ大学の定員が余る状況となるが、県立大学としては進学のために県外に流出している 18 歳人口に県内進学の道を開き、他大学とともに県内進学希望者が県内で学べるよう、環境づくりを進めていく。
- ・ 有識者会議は本年 3 月に設置。委員 12 名で構成されている。本学においては、有識者会議から提出された提言書を基に構想を策定していくこととしており、その内容については 2 月議会においてお示ししたいと考えている。
- ・ 文系新学部開設目的として、県内高校生の進学を受皿になることで若者の県内定着に積極的役割を果たすことを前提に、地域の資源を活用した新しい価値の創造（地域イノベーション）に関する知識を体系的に学ぶことで、地域の様々な課題や変化に対応し、先んじて行動できる主体性と実行力を身につけたリーダー的人材を養成することとしている。
- ・ 有識者会議では、学部の名称として「地域イノベーション学部」「地域共創学部」「地域探究学部」の 3 案をいただいた。地域独自のイノベーションを起こす人材を養成する学部であることや、学部名として「地域イノベーション」を使っている大学はないことから、「地域イノベーション学部」という名称を推す意見が多かった。
- ・ 実習・演習系の授業が主体となるため、入学定員は 70 名以上。県内他大学、特に私立大学への影響も考慮して、経済学部の定員を減員して全体の定員数を抑制することも必要ではないかと考えている。
- ・ 立地場所は、本学の永平寺キャンパスとまちなかキャンパス（JR 福井駅周辺）の 2 案が提案されている。特にまちなかキャンパスは、学生が公共交通機関で県内各地にフィールドワークに行くことができたり、通学にも便利で学生にとって利便性が高いほか、県民や企業との協働がしやすかったり、新幹線を使って全国の多様な人材を招聘できるなどの意見が出ている。また、駅周辺のにぎわい創出や、既存施設の活用にもつながるという意見も出た。
- ・ 新学部の内容として、地域のイノベーションの創出に欠かせない①地域産業（県内産業の発展）、②地域創造（新産業の創出）、③地域政策（持続可能な地域づくり）という 3 つの分野の専門的理論などを体系的に学ぶようなカリキュラム内容が考えられている。専門分野の理論を体系的に学びつつも、フィールドワークや課

題解決型学習に重きを置き、かなりの時間を割く。

- ・地域の実際のデータを収集、分析、活用するデータサイエンス演習を充実させることや、首都圏等の大学で学べる単位互換可能な国内留学制度、キャンパスの立地場所に関わらずまちなかを拠点とした教育研究の展開、企業や自治体と連携した長期インターンシップ、県内高校の探究科との連携強化にも取り組むべきとの提案が出されている。

(2) 質疑概要

○委員 提言書の内容や新学部の必要性等について理解が深まったが、地域リーダーを養成する学部で具体的にどのような学生を育てるのかイメージがつかない。新学部は、地域経済研究所の研究活動等の成果を活かすとのことだが、具体的に地域経済研究所でどのような成果が上がっているのか教えてほしい。

○理事長 地域経済研究所の研究活動等の成果を活かして新学部をつくるというのは、第3期中期計画にも記載されている内容でもある。地域経済研究所は県内企業や自治体等と共同研究を進めながら地域課題解決を目指しており、20年間の活動実績がある。その間たくさんの企業と関係性を築いてきた。新学部は、地域フィールド演習など企業等の協力を得る必要がある。学生には地域に出てもらい、県内で就職してもらいたい。地域経済研究所がこれまで培ってきた企業や自治体等との関係を最大限に活用することで、学生の県内就職への道を開きたい。

○委員 地域フィールド演習とは具体的にどういうことか。

○地域経済研究所長 2年生の後期に予定しているが、県内17市町を毎年1つずつ選定し、半年間かけて70名の学生を大きく3つのグループ(地域産業、地域創造、地域政策)に分け、それぞれの切り口で特定の自治体に入っていくことを想定している。キャンパス内で準備するとともに、自治体に出向いて聞き取り調査を行い、統計分析や文献調査も行う。最終的には年度末に報告書をまとめて、自治体や市民の方等の前で研究成果を発表することを想定している。3年生になると、前期には県外(東京等)、後期には海外にもフィールドを広げていく。3年生は選択必修、2年生は必修で考えている。

○委員 既存の経済学部の経営学科との差別化をどのように図っていくのか。明確な違いを打ち出さないと、高校生が迷ってしまう可能性がある。

○理事長 経営学科のベースは、経営に必要な理論を学ぶことが中心にある。地域にどっぷりつかって地域の課題を知り、研究し、解決策を見出していくというような活動は既存の経営学科では難しい。新学部とのすみ分けについては、構想をまとめた上でしっかりと伝えていくことが必要だと思っている。

○委員 文系新学部については大変興味がある。文系と理系の定義はどうなっているのか。

○理事長 新学部は文系という位置づけであるが、文理融合の側面も持っている。受験科目の文系・理系と、学部で教える内容とは若干の差があると考えている。

○委員 学部の位置づけは文系であっても、学生に教える内容としてはデータサイエンスのような理系的な分野の授業も必要だと思っている。フィールド演習等が既存の学部との違いだと思うが、一方で法律や税務などの理論を学習することも重要だと感じている。どういう科目を学ぶことになるのか、現段階で分かっていることがあったら教えてほしい。

○理事長 社会で働く際に必要な内容を大学で全て学ぶことはほぼ不可能だと思う。新学部が目指すリーダーとは、自治体の首長等になるということではなく、ファーストペンギンになるということ。フィールドワークを通じて、企業や自治体が抱える現状や課題について学びながら、自分が目指すべき道を探すことになると思う。

○地域経済研究所長 ベースとなる基礎的な理論はしっかり学ぶ必要がある。1年生の必修として、統計や経営学入門といった経済学の基礎理論を教えたいと思っている。2年生からの専門教育については、新学部の新しいスタッフで全て網羅するのは難しいが、重要なところは専任教員でやっていきたい。また、仮称ではあるが、「企業と地域」や「地域競争」、「自治体政策論」といった科目を置き、地元の企業や自治体の方に来ていただいて講義いただき、学生と演習するような授業を設ける。「技術経営」や「知財管理論」なども設ける予定である。

○委員 文系新学部というと法学部も文学部も考えられると思うが、高校生が希望する新学部は本当に地域学部なのだろうか。福井大学には国際地域学部がある。ホームページを見たが、新学部の内容と重複するような感じがした。新学部が高校生の県外流出を食い止められるのか疑問である。福井大学の国際地域学部とのすみ分けについて教えてほしい。

○事務局長 福井大学のほうは教育学部を再編してできた学部であり、カリキュラムの内容は国際教養系となっている。国際科目の教員が半分を占めており、カリキュラムも大半を占めている。そのほか教養科目系の教員が多く、社会科学系の教員が少ないと聞いている。幅広くリベラルアーツを学ぶような構成になっており、社会科学にフォーカスした学部ではないので、すみ分けはできると考えている。福井大学との違いは、今後構想の中で分かりやすく提示していきたい。

○委員 どちらにも地域という言葉が入っているので、似たような学部だと思う高校生も多いと思う。学部の名称は十分検討してほしい。まちなかキャンパスというのは、アオッサの有効利用を念頭に置いているのか。

○理事長　アオッサのFスクエアを念頭に新学部を考えているわけではない。しかし、まちなかにキャンパスがあるのは非常にメリットがあると思っている。公共交通機関の利用促進はもちろんのこと、まちなかに200名程度の学生が常時いる、という状況は有形無形の効果がある。まちなかに新しい学部棟を建設するという考えはイメージにないが、既存施設の有効活用を念頭に、費用対効果も含めて構想の中でも検討していきたい。

○委員　この学部で学んだ優秀な人材が地域ではなく、県外に流出する可能性もある。想定される就職先をみると、県内企業に就職したはいいが、実際に働く場所は県外という事例もある。企業にも受皿として、学生をしっかりと福井に残すという考え方を持っていていただくよう大学からも働きかけをしてほしい。

○理事長　指摘いただいた点は非常に重要であり、そのために新学部を設置するものである。

○委員　この学部を新設する目的として、県内高校生が進学する際の受皿としての役割を果たし、若者の県外への流出を抑制する、ということによいか。

○理事長　その点も重要な論点である。県立大学が地域から必要とされる研究や地域貢献を行うために学部を新設するという目的もあるが、県と課題を共有するという意味では、文系学生、特に女子学生を地域に残したいと強く思っているところである。

○委員　特に女子が県内に残ることが大事だと思うが、今後人口減少が進む中、企業は日本人だけでなく外国人労働者も雇用していかないといけない時代になっていく。そうになると、英語が必須になってくる。新学部においても英語に関する授業の充実をお願いする。

○地域経済研究所長　新学部ではネイティブの方を選任教員として雇用し、実践英語に力を入れていく。製造業や観光の現場、自治体の職員になっても英語で話せるよう実践英語を強化する。

○委員　文系理系関係なくデータ処理や統計は重要なので、新学部にはデータサイエンスの授業が盛り込まれていることはすばらしいと思うが、科目の中に政治や議員に関する内容も盛り込んでいただけないか。地域課題解決のためには政治が大きく関わってくる。常設の科目でなくてもいいので、学生に教える機会を設けてほしい。

○理事長　データサイエンスについてはどの学部でも必要な要素だろうと思うが、特に新学部には必要だと思うので、学生にしっかりと身につけさせ、社会に送り出していきたい。また、地域リーダーを養成する学部の中で政治に興味を持つ学生もいると思うので、演習等の課程の中で議員との連携も図りながら、どう

いう形で実現できるのか検討していきたい。

○委員 4年間の学生生活の中で、新学部ではこういったものが獲得できるといった明確な目標を打ち出すことを検討していただきたい。

○地域経済研究所長 今後の制度設計の課題ではあるが、頑張って実績を上げた学生への表彰等のインセンティブについては考えている。

○委員 立地場所について先ほどもアオッサの活用の話が出ていたが、アオッサは知の拠点にすべきだと考えている。西口は商業エリア、アオッサは知の拠点、アリーナができればスポーツ文化エリアというふうに、まちづくりにおいてはゾーニングしたほうがよいと考えている。まちづくりにも根差した学部になるように、ぜひ検討してもらいたい。

○理事長 現在、まちなかキャンパスが実現可能かどうかを探っているところである。大学は建築関係の法令で、細かく設置基準が決められている。まちなかに空いている場所があるからよいというわけにもいかない。法令関係等をクリアできるかを含め、まちなかにどういう遊休施設があるのかを調査している。場合によっては、分散することも考えられる。そういったことを含めた上で可能かどうかを構想の中でお示していくので、またご意見を聞かせてほしい。

○委員 我々のトップミッションは、学生に県内にいてもらうということである。学部新設において、細かくカテゴリーをつくるよりも、文学部や法学部といった大きなカテゴリーでつくったほうが、学生が残りやすいのではないか。ニッチな学部は、法学部も医学部も全部あるような大きな大学がつくるパターンが多い。ニッチな学部を新設しようと考えた理由は何か。

○理事長 当初は、文学部や法学部などのスタンダードな学部の設置から検討を始めた。県内大学と議論を進めていく中で、文学部的なものは県内の他大学にも同様のものがあつた。また、法学部については県内で法律家が就職する道がどれくらいあるのかや、法律を学んだ学生がどれくらい県内に定着するか、北陸地域全体の法学部定員数を考え、今福井に新たに法学部をつくる必要があるかどうかの議論があつた。地域に残って就職してもらうために県立大学として何ができるか議論を重ねた結果、今のような新学部の形になっている。分かりにくい部分もあると思うので、十分に説明していかなければならないと思っている。高校生が福井で学んで就職し、地域を担うということが一番の論点にした結果が今回の新学部である。

○委員 県立大学のブランド力を向上させていくことによって、県立大学に進学したいという人も増えると思うので、ブランド力向上にも意識して取り組んでほしい。

2. 福井県立武生高等学校

(1) 説明要旨

○探究進学科の概要

- ・探究進学科が2クラス、普通科が6クラスある(1クラス38人)。2年生に進級する際に、探究進学科は探究文科、探究理科に分かれる。
- ・今年の4月に、文部科学省よりSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の16年目の指定を受けることができた。
- ・SSHに指定されたことにより、国から年間約800万円の予算が5年間配分される。これを有効活用して最新の実験機材の購入等を行い、生徒たちの研究等を進めている。SSHには探究進学科も普通科も関係なく、全校態勢で取り組んでいる。
- ・校内での学習だけではなく、若狭町の熊川宿でまちづくりに関する調査を行ったり、鯖江市で井戸水の水質調査を行ったりするなど、地域に出向いた活動も実施している。研究成果は大学の先生の前でプレゼンテーションをしたり、ポスターセッション等で発表したりしている。
- ・大学や研究機関、企業等と連携して学習を進めているのも本校の特徴である。
- ・教科横断型授業が、他校にはない本校の学びの特徴である。これは、いくつかの教科の授業を一緒にやることによって、生徒の思考力を高めたり、興味関心を深めるものである。
- ・研修や講義が充実しているのも特徴。SSHの予算を使い、国内の様々な施設を訪れるとともに、今年はシンガポールで1週間の海外研修を行った。
- ・県内企業による出前授業も実施している。直近では企業の研究員に来ていただき、その企業の技術について授業をしていただいた。出前授業の前後で、県内企業に対する生徒の意識が大きく変わったことを実感している。
- ・理系女子の増加にも取り組んでおり、女性研究者による講演も開催している。この講演を受けたことにより、理系に進もうとする1年生の女子生徒が増えた。

○探究進学科の成果と課題

- ・授業視察で見ていただいた福井県の断層の研究は、先輩から代々受け継がれてきたものであり、現在で4代目である。この研究で昨年はSSH全国大会奨励賞を受賞した。今年の生徒は、学生科学賞の県審査で最優秀賞を受賞している。
- ・探究進学科だけでなく、普通科の生徒も課題研究を行っている。例えば、JT Bと連携して米粉ストローの商品開発を行った。この研究はプレゼン甲子園全国大会で特別賞を受賞した。大学生が研究する内容を高校2年生で行っているようなイメージである。
- ・生徒たちは高校での学びを大学につなげようとすることから、大学進学に関してもいい影響を及ぼしている。ダイヤモンド社が発刊したダイヤモンド・セレクト2023年8月号において、本校は全国2,254高校の中で国公立大学合格率29位、合格力46位にランク付けされた。ちなみに1位は灘高校である。探究進学科から難関大学に多くの生徒が進学している。

- ・普通科の生徒も大阪大学や京都大学に合格している。普通科も探究活動を行うことによって、学習のモチベーションが上がっていると言える。
- ・探究進学科、普通科合わせて福井大学への進学者割合は全体の17.1%で、過去3年間で最高になっている。地元志向の生徒が増えたのも探究活動の成果である。
- ・課題としては、普通科の探究学習をどう充実させていくかである。また、現在の2年生からは新課程の大学入試に変わる。これまで一般入試と推薦入試の割合が9：1だったものが、来年度以降は7：3ぐらいになる。探究活動に取り組んでいる学校にはチャンスがある。探究活動の成果を大学での取組にどうつなげていくか、大学進学にもどう結びつけていくかが今後の課題である。

(2) 質疑概要

○委員 発表している生徒と聞いている生徒で意見交換や協議をすることによって学びが深まっていくと思うが、そういったことはやっているか。

○校長 生徒の発表に対して質疑応答もあるし、生徒同士がタブレット等も使いながら評価している。また、評価したことに対して、それがよかったのかどうか教員と生徒と一緒に考える、モデレーションも実施している。

○委員 大学受験となると推薦だけでなく共通テストもあると思うが、共通テスト対策はどのように行っているか。

○校長 共通テスト対策としては個別指導を充実させ、塾のような形になっている。また、成績が下位の生徒については頑張ろう会への参加を呼びかけたり、もっと上を目指したい生徒に対しては、探究カフェや難関ダッシュ講座を実施している。

○委員 昔は教科横断型の授業はなかったと思うが、取組を始めた経緯等を教えてほしい。

○探究文科主任 教科横断型授業は、最近全国的に広がりつつあるものである。学域を超えた学びが大学でも求められているので、それを早期に実践することは意味のあることだと考えている。世界史の授業の中で出てきた疑問について、物理の教員が答えたことがもともとの始まりである。複数の分野を横断することで、1つの事象をいろんな角度で見て思考が深まる。

○校長 5年くらい前から若手の教員を中心に、PT活動という緩い研究会を月1回程度実施している。その活動の中で、教員からこういった活動をしないかという提案があり、緩やかに始まったものがシステム化された。

○委員 ぜひ、教科横断型授業をほかの県立高校にも広めていってもらいたいと思う。鯖江高校でも探究学習に取り組んでいるが、全然時間が足りなくて、こ

これまで自由で自主性の高い探究活動にはなっていないように見受けられた。武生高校ではどのような工夫をしているのか。

○校長 以前は50分の7限授業であったが、現在は55分の6限授業にして、毎日30分程度放課後に時間を設けている。その時間を活用して生徒は研究ができるようになったし、教員も余裕を持って対応できるようになった。本校はSSHに指定されていることもあり、割と自由にカリキュラムを組める。そういったことも利用して、生徒たちに時間をつくっている。

○委員 教科横断型授業を見る限り大学レベルの授業だと感じた。教員でも難しいところがあると思うが、どうやってカバーしているのか。

○探究文科主任 教員同士がお互いの教科で分からない知識を補完するイメージである。導入は数学や国語といった1つの教科であっても、その内容を深めていくために別の教科の知識が入ってくる。例えば、国語で渦巻の事象に関する題材が出てきた際、その事象について地学的観点から考察していくことで考えをまとめていくような内容になっている。大学の先生に入ってもらったこともあるが、基本的には授業に入る教員同士が緩やかにつながりながら授業の組立てを行っている。

○委員 ざっくりでいいが、教員が説明をして問題を解くというような伝統的授業と教科横断型授業の割合はどれくらいか。

○校長 3年生は旧課程であるので、伝統的な授業が多い。1年生、2年生については新課程であるので、教科横断型授業も実施している。年間の授業の中でどうやってどのタイミングで入れていくかを教員が研究している。まだ完成形には至っていないが、全国的に見れば教科横断型授業について本校は先駆者である。

○委員 世界史を外国人教師が英語で教えているというのは本当に素晴らしいと思った。単純に英語の勉強としても興味が深まると思うが、日本の歴史などを海外で説明できるのは重要なことだと思う。全国的にPRしてほしい。

○探究文科主任 先日、国語と英語の教科横断型授業の中で、日本語の百人一首をどうやって英語にして海外で広めるか、という授業も行ったところである。そういった活動が今後も広がっていくといいと思っている。

○委員 かなり前の視察で千葉県の船橋高校だったと思うが、そこもSSHに指定されていた。生徒が自由なテーマで研究に取り組んでいる様子が印象的だった。説明を受けた際に、難関大学に○人合格といった学校間競争につながるようなデータが出てこなかったの、そういったものはないのかと質問した際、「我々は日本を担う生徒を教育しているので、学校間の競争はしていない」という回答があり驚いた。その点についてどう考えるか。また、大学を選ぶ際に、探究進学

科で学んだ生徒と普通科の生徒で傾向に違いはあるのか。

○校長 本校が目指すものも、将来の日本を担う生徒を育てることである。一方で、少子化の中でいかに生徒を集めるかという課題もある。保護者からも要望が多いため、本日お示ししたように〇〇大学に合格者〇名、というデータも公表している。また、受験における傾向であるが、普通科の生徒が探究しているテーマは探究進学科と少し違う。探究進学科はグローバルな視点から探究活動に取り組んでいるが、普通科は地域と連携したテーマが多い。そのため、普通科の生徒のほうが地元志向が強い。その辺を探究進学科の生徒にもどう広めていくかは、今後の課題だと思っている。

○委員 大変だと思ったのが、教員が生徒をどのように導くのかという部分である。教員の育成をどのようにしているのか。また、研究のテーマはネットの世界に山ほどあり、実験の想定から仮説、考察、結論まで出ているものもある。楽をしたければそこから取ってくることもできる。全部でなくても何割かそこから取ってくるということもあると思う。内容が多岐にわたるので、テーマや導き、ネットから取ってきていないかの確認が難しいし、生徒の評価も難しい。その辺はどう考えているか。

○校長 教員の育成は大きな課題であると思っている。教員が異動した後に研究が継続できないというのでは困る。大学レベルの研究に対して、教員がどのように対応するのか我々も考えていかなければいけないと思っている。本校では教員の育成を重視している。本校で育った教員が、探究科があるほかの学校で探究活動を広めてほしいと考えている。本校ではPT活動にも力を入れているし、教職大学院とも連携しており、今も教員2名を派遣している。学びのサイクルを途絶えさせないように、次の世代につなげていく取組を実施している。

○探究文科主任 御指摘のとおり、問いの設定は非常に難しい。この先どうすればいいのかという見通しを立てなければ研究が進んでいかないため、先人たちがどんな研究をしているのかしっかり学ぶことがまず重要である。ネットに関しては科学者の倫理を強調し、絶対にそういうことをしないように指導している。難しいところは大学の先生に協力いただいている。

指導と評価は表裏一体だと思っている。評価の際に物足りなかった場合は、我々の指導が至らなかった場合が多いと考えている。課題研究の評価については、いろんな分野を複合してなされるものである。課題研究のそれぞれのフェーズに応じた指導を実施している。生徒にはどういう点を評価するのかを事前に明らかにして、意識させるようにしている。

○委員 生徒の自由なテーマ設定に対して教員が勉強するというところで、大変だろうと思うがよい導きをしてあげてほしい。

(3) 授業視察

- ・探究進学科の授業を視察
(※) 視察をしながら行った質疑応答については省略する。

総務教育常任委員会県内視察（福井県立大学）



総務教育常任委員会県内視察（武生高等学校）

